　　　　　通信第七十八号　　他力の信心・他力の念仏

　つくつくぼうしの声が聞こえてきました。暑い日が続いていますが秋の気配がしてきました。聞光道を迎えるにあたり、前日掲示板を書き換えました。毎月、福岡県田川市から必ずご参詣下さる新開清英さんと智英さん父子は駐車場からわざわざ三門の方に回って掲示板をじっくり見られてから本堂に上がってこられます。私にとっても励みになります。今回は私自身のために三枚書かせていただきました。

　　私は無始以来、今日の今まで

　　今この一瞬も迷い続けて来ました。

　　迷い続けているのです。

　　ほめ続けられていたら、

　　今日の私はありません。

　　　人間本当に自分の本心を照らされたら

　　　素直な人は一人もいません。

　　「教えを自分へ」と聞かず、

　　　聞いたことを「自分の徳」にする心。

　　　その無始以来の邪見があるからこそ

　　　無始よりの慈悲がある。

ご書信の第九十二信の中に在るお教えです。この一瞬も迷っているからご本願のお救いを頂いているとのことです。不足や不安の生活の中で、「心の底から感動したい、何か確かなものに遇いたい、つかみたい」と。青年の頃から長く私の心に覆っていた雲霧でした。

　その雲霧のはるか奥底にあった闇は「弥陀タノム一念」の時晴れました。しかし、今も雲霧は心に覆うのです。迷いの心は変わりません。煩悩いっぱいです。しかし、暗い方へと沈んではいきません。太陽が出たら雲霧の下は明るい。と『正信偈』の中に親鸞さまが教えてくださっています。

　　摂取の心光は常に照護したまう

　　に能く無明の闇を破すといえども

　　貪愛瞋憎の雲霧

　　常に真実信心の天をへり

　　譬へば日光の雲霧に覆はるれども

　　雲霧の下明かにして闇なきがごとし

私は「ああ闇が晴れた」と実感していたのに、ちょっとしたすれ違いや事件に遇っては雲霧が心に覆っては「ああまた崩された」ということが何度も、何度もありました。喜びが大きかった分落胆も大きかったのです。そんな私にとって「迷い続けているのです」というお一言は深いお慈悲のお教えであります。しかも「闇が無い」というのですから、それまでの私の考えや、体験してきたこととは次元の違う世界であります。

　次に、聞いたことを「自分の徳にする心」法執です。無始以来の邪見ですから、私に覚えがないのです。どうにかなる世界ではなかったのです。教えは早くそこに気づけと呼びかけられ続けてきたのに聞いて何とかなろうとしてしまうのです。自分が何とかしてという自分がとれません。もどかしいところを行ったり来たりします。でもそれは求道において尊いことであります。歩んでいるが故の苦闘であります。感情や理解力では壁が崩れません。この関所は薄紙一枚とか後生の一大事として大事にされてきました。ここまで来ると、そこを通り救われた得道の人、善知識（師匠）様の存在が必要不可欠なのです。

大石先生に遇わなかったら私は『教行信証』は一言も読めなかったでしょう。少し理解はできても信ずることが出来ずに「わからない」と言って、離れていったに違いありません。

今日のお朝事に

　　ただ仏恩の深きことを念じて、人倫のを恥じず。もしこの書（『教行信証』）を見聞せん者、信順を因としを縁として、を願力にし、妙果を安養にさんと。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　聖典４００頁

信ずることが根本となって、疑謗（私自身の中に起こる疑い、外部からのりということでしょう・大石先生の注意書き）がご縁となる、油や炭が火に転ぜられるように本願力によって明るい方、すなわち浄土の方へ転ぜられていくのです。安養は肉体が死んでからの世界ではないのです。日常生活、宿業のただ中に顕現されて、証明される世界なのです。それが真実信心のすがたであります。

　蓮如上人の御文様の中で有名な「」があります。

　　信心獲得すというは、第十八の願を心（に）得ることなり。この願を心（に）得るというは、南無阿弥陀仏のすがたを心（に）得るなり。このゆえに、南無と帰命する一念のにのこころあるべし。これすなわち弥陀如来の、凡夫に廻向しまします心なり。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（）は藤解照海先生のご指南

　南無阿弥陀仏のすがたとはどういうことなのかが長い私の疑問でした。信心のすがたと同じで

あります。宿業のところに如来様からのご廻向の救いを得ることであります。そうでなければ自

利・利他（自らが如来の本願力にすくわれ、他にも救いが伝わっていく）されるはずがありませ

ん。他が救われて、自らが救われたことが証明されるのです。自利には利他の救いが含まれてい

るのです。

大石先生はそこを実地に見せて下さり、書き残して下さいました。私は先生のご書信を恐らく

百回以上読ませて頂いたのですが、自分のことをふくめて登場人物にとらわれてご本願が聞こ

えていなかったのです。

　蓮如上人のあと江戸時代は多くのご門徒さん達はお文さまで育てられました。熱心な人は五冊

の御文さまのがで真っ黒にり切れているのを見たことがあります。最近はほとんどの

門徒さんは朝夕拝読していません。僧侶も私も含めて読んでいません。ということがあり、

ということも忙しい現代人には時間がとれません。都会では仏壇のない家が多くをしめて

います。一気に信仰心は現代の日本人からは冷えてしまいました。寺離れ、仏壇じまい、墓じま

いが珍しいことではなくなりました。コロナの流行以降さらに法要には参詣者が激減していると

聞きます。そういう状況にあることは察しがつきます。

しかし、聞光道は三百四十八回一貫して続いています。はじめから参加者は少ないのです。五

人くらいの時もありました。最近は遠くの人が参詣されます。それでも多くて十二、三人です。今回の聞光道でも知らされました。説く立場でも、聞く立場でも共に聞法であるということです。

　浄土の功徳荘厳第十七にがあります。如来のみ心にかなうならば必要

なものはわしが責任をもってそろえる。擬人化した表現ですが本願のおはたらきにかない、使っ

ていただくということであります。　私の聞法を始めてからの有り様を見るとその通りと言わざ

るを得ません。なにかしら、汽車賃なども与えられて来ました。ですから、どのような時代にな

ろうとも聞法は続けられるのです。むなしさや、絶望や不足が消されます。暗く沈み込みません。

聞法しぬき、聞法し抜かされてきました。本願力のおかげです。先ほど、たまたまアメリカでご

活躍の羽田信生先生から直接私へサインをして頂いた「内奥への旅」❘親鸞聖人の「二河白道」

観❘という本を開きましたら、

聞くということが仏道を歩むということです。私たちの人生で、聴聞の一道を歩むということ以上の喜びはないのです。聴聞以上の偉大なる人生の目的はないのです。それが「往生浄土」の生活なのです。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　「内奥への旅　」・方丈堂出版刊・　一〇八頁

　現代のアメリカでも、日本の昔の貧乏な時代でも人数は少ないかもしれませんが聞法者は大利

益を確かに頂いていたのであります。私も頂いています。

　清沢満之先生は「我信念」（真実信心）の中で

　　私は、他の事により多少の幸福を得られないことは無い、けれども、いかなる幸福もこの信念（他力の信心・他力の念仏）の幸福に勝るものはない。故に、信念（他力の信心・他力の念仏）の幸福は、私の現世における最大幸福である。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　「清沢満之先生のことば」永田文昌堂刊・四十一頁

　　如来を信じて現世に利益を得るとは、数百万（現代では数百億か）の財を得るような小利益ではない。如来を信ずることによって無限の利益を得るからである。無限の利益とは、今の生活のままで大満足を得させてもらうことである。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　「清沢満之先生のことば」・永田文昌堂刊・七十七頁

今日は三十日です。台風十号が九州に上陸して強風のために掲示板は倒れてしまいました。道

路の通行の邪魔になるので役場の人が来て境内に運んで下さりました。三十年近くたち、台が朽ちていたので起こるべくして起こったことです。大事な役をしていますから、掲示板はまた新しく建つでありましょう。

台風が来るとよく思い出すことがあります。私の記憶に残る一番大きな台風が去った日は聞法会の日でした。まだ私が三十代のころでした。「今日法座はあるんで」「あるに決まっとる」その時は月二回の聞法会でした。後に長仁寺三羽ガラスと呼ばれるようになった中心人物の吉崎ハツノさんからの電話でした。常識では開ける状態ではなかったのですが、その返事をした後からの窓ガラスなどの片づけ等のはかどることが自分でも驚きでした。

三十六年前、大分に帰り、すぐに始めたことは、清沢満之先生の流れを受ける願いから『聞光洞』という名前の聞法会と掲示板でした。そして、しばらくして寺報の『聞光洞』でした。紆余曲折あり一度だけ聞法会をやめようと思ったことがありました。ハツノさんと大石先生が一週間の間に亡くなり、帰命していない私にとってのショックは自分でも思いがけないほどの打撃でした。いろいろな方々の励ましを頂き「洞」を「道」と改め再開されました。その数年前から朝五時半（途中で六時）からの朝参りが始まっていました。江島晃教・安子さんご夫妻は宇佐市から四時すぎに自宅を出られ、中津から友松法純さんがご参詣下さいました。それが十年間続きました。それから婦人会の法座や長仁寺報は法喜が担当、通信を私が担当することになりました。そして、初心者の会、輪読会、リモート法座、ユーチューブ、本願道場と展開してきました。世の中の有り様もずいぶん変わって来ました。

昨日、高岡の重共さんから台風の安否を兼ねて、九月の本願道場の確認の電話をいただきました。台風の中、有意義な長電話となりました。教えられたことは、名士にふたつあり。一つは有名になり、大勢の人があつまる。二つに明士、をめざし、本質を失わない。人数は少ないとのことです。私はお聞かせいただきつつ、蓮如上人のお教えをおもい出しました。

　のと申すは、人の多く集まり、威の大なる事にてはなく候う。一人なりとも、人の、信を取るが、一宗の繁昌に候う。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　蓮如上人御一代記聞書第一二二条

ぼんやりとしていた私の自覚をはっきりさせよとの激励でありました。以前テレビで京都の小さな料理屋さんが紹介されていました。ウナギの寝床と言われるように路地の奥の奥にある店はカウンター席の人数も少ない小さな店です。「ここの味がわかってくれている人がこられるのが嬉しい」とのことでした。不思議に何十年も続いている店でした。こういう有り方がいいなと法喜と二人で話したことです。

親鸞様にはもともと寺はありませんでした。（聞法道場）で御法話、座談されたのです。この通信や本願道場を場としてご縁の同行さんと信心の道を歩み続けていく新たな覚悟をさせて頂きました。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　常照

令和六年（２０２４）九月初旬